



筑摩世界文學大系

21

リチャードソン ス タ ー ン

海老池俊治 訳
朱牟田夏雄



パミラ
トリストラム・シャンディ

筑 摩 書 房

筑摩世界文學大系 21

昭和四十七年十二月十五日

初版第一刷発行

リチャードソン スターン

訳者

海老池 俊治
朱牟田 夏雄

発行者

井上 達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九)七六五一
振替口座東京四一―二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20621 (出版社) 4604

目次

リチャードソン

パミラ

海老池俊治訳 5

スターン

紳士トリストラム・シャ
ンデイの生涯と意見

朱牟田夏雄訳 319

サミュエル・リチャードソン

D・井出弘之訳 663

スターン論

H・朱牟田夏雄訳 671

『トリストラム・シャンデイ』
の時間

J・出淵マイユル博訳 676

解説 リチャードソン

海老池俊治 688

スターン

朱牟田夏雄 693

年譜

698

リ
チ
ャ
ー
ド
ソ
ン

パミラ

淑徳の酬い

手紙一

御両親様——たいそう困ったことをお報せしなければなりません。でも、少しは慰めの種もあるのですけれど。と申しますのは、奥様が先日来のあの御病気でお亡くなりになり、わたしたち一同悲歎にくれています。召使みんなに御親切な、ほんとにいいかたでしたから。ことにわたしの心配は、わたしは奥様づきの小間使でしたから、これでまた、寄るべがなくなつて、うちへ帰らなければならなくなるのではないかしというこでした。お二人とも手一杯の暮らしをなさっているのに……奥様のお心尽くしで、わたしは読み書き算術を仕込まれ、針仕事も相応にでき、そのほか、分に過ぎた芸ごとを身につけましたが、そういう芸ごとが十分お役に立つようなお邸はめつたにないでしょう。でも切羽詰まったときにいつもわたしをお慰し下さいました神様の思しめしで、奥様は御臨終のちやうど一時間前に、わたしを召使をひとりひとり若旦那様のお手に託して下さいました。わたしの番になりますと（わたしはお枕もとでただシクシク泣いていました）、こうおっしゃ

ただけでした。「お前——ちよつと言葉をお切りになつて——「可哀そうなパミラをお忘れじゃないよ。」——それが奥様のいまわのお言葉でした。思い出しても涙が出て来ます。この紙にもしみがついているかもしれません。

でも、神の御心はきつと行なわれます——で、
（お慰めの種）とは、わたしはうちへ帰つてお二人の厄介者にならなくてもすみそうなのです。御主人がこうおっしゃいました。「お前たち女中もみんな面倒をみてやるよ。パミラには、」
（そして、わたしの手をお取りになりました。みんなの前でお取りになったのです）、「母のために、お前にはよくしてやりたい。わしの衣類の世話をしてもらおう。」有難いことではありませんか。奥様の召使みんなが喪服と一年分のお給金を頂きました。わたしはまだお給金のきめがありませんので（相当のこと）をしてやるうと奥様はおっしゃつていました。が、家政婦さんに申しつけて、ほかのものと同じく喪服を下さしました。そして、お亡くなりになったとき奥様のポケットに入つていたギニー金貨を四枚と、銀貨を、御自分でお渡し下さつて、おつしやいました。ちゃんと働いていれば、母の思い出のためにもよくしてやろう、と。ですから、その金貨をお送りしたいと思ひます。わたしは神様のお助けでなんとかやりましよう。そのうちから、借金を返して、余つたら不時のためにとつておいて下さい。もしもつと手に入りましたら、お二人のことを考えるのがわたしの務めですし、きつとそうしようと思ひます。わた

しが何ひとつ自分でできなかったときに、わたしのことを考えて、慈しんで下さつたのですから。そちらの方へ行く下男のジョンに持つて行つてもらいます。でも、何が入っているかジョンは知りません。音がしないように、紙にキツチリくるんで、奥様の丸薬箱に入れておきます。ジョンの前で開けないように気をおつけ下さい。きつと、お二人とも悲しんだり喜んだりなさることでしょうね。どうかパミラのためにお祈り下さいように、
かしこ

いま、とてもびっくり仰天しました。奥様の化粧室でこの手紙を畳んでいましたら、御主人が入つていらつしやいました。ほんとにギョッとなりました。手紙を懐へ隠しかけますと、わたしが震えているのをごらんになつて、微笑みながら、「誰に手紙を書いていたんだね、パミラ」——あわてて、「御免下さいまし。両親にでございます。」「じゃ、どれほど書きかたが上達したか見せてごらん。」オドオドしているわたしを尻目に、黙つて手紙をお取りになると、ずつと読み終わつて、返して下さいました。——わたしはまたいいました。「御免下さいまし。」でも、なぜそんなことをいったのかわかりません。御主人はいつでも御両親に御孝行でしたから、わたしはそうだとしても、お怒りになるはずはないのです。じつさ、お怒りになりはしませんでした。わたしの手を取つて、おつしやいました。「年よつた父母に親切なのは立派な心掛けだ。こんな毒のない手紙を書いたからつて、怒りやしないよ。だが、一家の噂話を漏らすよ

うなことは十分用心しておくれ。ちゃんと働いて、みつともない真似をしないようにおし。それしたら、それだけわしの氣に入るわけだ。」それから、「パミラ、お前は字が上手だ。綴りもまあまあだ。母が骨折してしつめたおかげだね。お前は本を読むのが好きだとよく母がいつていたが、修養のためになら、汚さないように氣をつけて、母の本をなんでも見ていいよ。」わたしはすっかり動転しました。そのやさしい言葉にただお辭儀をして、泣くだけでした。ほんとにあんない旦那様はありません。でも、こんなことを書いていると、長くなりそうですから、このへんで、パミラ・アンドルーズ

手紙二「右の返事」

パミラへ——お前の手紙を見て、わたしもお母さんも、ほんとうに、困ったことになったと思ひました。もつとも、多少は慰めの種がなくては……奥様の御死去は重々困ったことです。お前の面倒を見て、いろいろ芸ごとを仕込んで下さり、この三、四年しよつちゅう衣類を恵んで下さり、ひとかどの女が身につけても恥ずかしくないようなもので頂いたのだからだが、何より困ったことは、お前がそんなに身分不相応な扱いを受けて、心得違ひをしないかということ。お前の様子がよくなった、上品な娘だと、みんながいます。きれいだといふ人もあります。もうせん、半年も前だったか、お前に会ったとき、わたしも、わが子でなければ

ばそう思ったことでしよう。が、身を汚してもしたら、そんなことはいつさいなんにもならないのだ——じつさい、わたしはお前のことが心配になって来ました。やましい振舞いをしてが最後、世界中の財宝を手に入れても、入れがいが無いのだから。たしかに、わたしは貧乏に違ひないし、毎日の暮らしも安穩ではない。これでも、むかしはまあまあのもあつたのだが。しかし、子供の操を売って暮らしをよくするくらいなら、水だけ飲んで、溝さらえの仕事をしたほうがましだと思っています。

若旦那が悪だくみをお抱きでなければいいが、だが、そんな大金を下さったり、親切なことをいって下さったり、お前の様子がよくなったとお褒めになったり、それに、みつともない真似をしなければ、親切にしてやろうなどと、意味ありげなことをおっしゃったと聞くと、わたしは心配で息も詰まりそうなのです。

そのことをマムフォード後家に話してみしました。以前、立派なおうちで働いていたことのある人だから。そして、少しは安心しました。女主人が亡くなったとき、その小間使や、御病氣中そばについていたものに、御身のまわりの品を下さることは珍しくないそうだが、それにしても、若旦那はなぜそんなにやさしく微笑みかけたりなどなさるのか。お前のような小娘の手をお取りになるのか。二度もお取りになったそうだが、なぜわざわざわたし宛ての手紙を読んで、字や綴りをお褒めになるのか。母上の御本を読んでもいいなどおっしゃるのか。

そう思うと、ほんとうに胸が痛みます。お前は、その御親切に浮き浮きしている。やさしいお言葉が（それが他意のないものなら、じつところ、たいへんな御好意だ）氣に入ったらしい。だから、心配なのです——ほんとうに心配なのです。お前が有難さの余り操というあの珠玉をお札に差し上げてしまひはすまいかと。もしそんなことをしたら、財宝も、好意も、いや、この世のどんなものをもらつても、取り返しがつきません。

わたしも長い手紙を書きました。が、もう一言します。貧乏で不運な目に会つてはいるが、わたしは神様の御慈悲を信じて、まづとうに過ごして来ました。で、このまま曲つたことをしなければ、この世では恵まれなくても、来世は幸せになれると思つています。だが、わが子が操を失つたら、それこそ、どうしようもない悲歎にくれて、すぐこのへ白髪をして墓にくだらしむるゝことになるでしょう。

だから、わたしたちを愛するなら、神様の恵みを望むなら、あの世での幸せを望むなら、用心するようにと、わたしは二人は願ひます。だから、少しでも操を汚されそうになったら、きつと、万事を棄てて、ここへ帰つてくるように。わが子が操より世間的な利得を有難がつたなどといわれるくらいなら、お前がぼろをまといつて行つたほうがよいと思ひます。

孝心の贈りものはうれしく受納します。が、安心のできるまで、使うわけにはいきません。

娘の恥の代償に与る心配がありますから。で、しばらく、盗まれないように、窓の上の草屋根へぼろにくるんで仕舞っておきました。心からお前の幸せを祈ります。心配しつつ、

両親 ジョン・アンドルーズ
エリザベス・アンドルーズ

手紙三

父上様——お手紙を拝見して気が休まらなくなりまして。御主人の御親切に有難さでいっぱいでしたこの胸に疑念が起ったからです。でも、お人柄を汚すようなことはなさるまいと思います。わたしの様な可哀そうな娘に手出しをなすつてもなんにもならないでしょうから。が、一番気が気でないのは、父上がわたしの操をお疑いになっているらしいことです。いいえ、父上も母上も御安心下さい。神様のお助けによつて、お二人のへ白髪をして悲しみて墓にくだらしむるゝようなことは決してしません。女の操にもとるような振舞いをするくらいなら、ひと思いに死んでしまいます。どうぞ御安心下さい。いままでしばらく、わたしは分に過ぎた暮らしをして来ましたが、誰に誘惑されても、せっかくの評判を落とすくらいなら、貧乏とぼろ着と、パンと水だけに満足します。それで十分です。死ぬまでお二人に忠実な娘をお信じ下さいますように、

かしこ
御主人は相変らず愛想よくして下さいます。いまのところ、心配の種はありません。家政婦

のジャーヴィスさんもとてやさしく、みんなわたしを好いて下さいます。やさしくしてくれる人が、みんな、わたしに悪だくみを抱いているというわけでもありますまい。誰からも尊敬されるように振舞おうと思います。わたしが人にひどい仕打ちをしなければ、人もわたしにすまいと思います。ジョンがよくそちらのほうへ行きますから、そのたびに寄ってもらい、手紙か（そうすれば、わたしの手がそちらへ届くわけですから）、でなければ、口伝えでも、消息をお伝えしましょう。

手紙四

母上様——この前の手紙は父上への返事でしから、こんどは母上に書きます。といつても、格別申し上げる種もなく、この手紙を御覧になったら、わたしを自惚れた小娘だと思ひになるだけのことかもしれませんけれど、でも、わたしは我を忘れるほど高慢な顔はすまいと思つています。が、自分が褒められるのを聞くと、誰でも内々うれしいものではありませんか。じつは、こういうことなのです。御存知の御主人のお姉様のデイヴァーズさまがこのお邸に一月ほどお泊りになっていますが、わたしに目をかけて下さり、安っぽく人とき合わないようにせよと御忠告下さいました。お言葉によりまして、わたしはきれいな娘で、みんなに評判がいい、誰にでも好かれる。だから、男衆を近づけないように注意しなければいけない。そうすれば、その連中もかえつてよく思うだろう、とお

うしやるのです。

ですが、うれしかったことは、ジャーヴィスさんのお話なのですが、御主人と奥方がお食事の中にわたしの噂をなさったとき、あんなきれいな子を見たことがない、きれい過ぎて独り身の人のうちにいるのは不都合だ、御主人が結婚なさったら、奥様がお手もとにおおきにならないだろうと、奥方がおっしゃったそうです。すると、御主人が、たしかにずいぶん磨きがかかったよ、子供とは思えぬ分別もあるしね。だが、その取柄が身の仇になるとは可哀そうだ——「いいえ」と奥方がおっしゃったそうです。「わたしのところへおよこしなさいよ。」それは好都合だ。お宅のような後ろ立てができたら、申しぶんはない。「じゃ、わたし主人に相談してみます。」年はいくつだとおききになりましたので、ジャーヴィスさんがせんだったの二月に十五になったとお答えしました。「そう。この娘っ子が（と奥方はわたしたち女中をお呼びになるのですが）ずっと気をつけてさえいれば、姿恰好も、心掛けも、まだこの先いよいよ磨きがかかるよ」

ところで、こんなことを吹聴して、浅はかな子だと思ひになるでしょうけれど、父上も母上も、御主人がそんなにやすやすわたしをお手放しになりそうな御様子に、わたし同様、ほととなさるのではないでしょうか。御主人のお気持には、後ろぐらいところがないように見えません。が、ジョンがすぐ出かけます。いずれ、ま

た、かしこ

どうぞ御安堵の上、あのお金をお使い下さい。

手紙五

御両親様——ジョンがそちらのほうへ行きま
すから、また手紙を書こうと思います。喜んで
使いたってくれるのです。お二人に会ってお
話をうかがうのが楽しいといっています。お二
人とも物わかりがよく、まっとうでいらっし
やるから、いつでも何かためになることが聞け
るというのです。あんな立派なことがたが不
意な暮らしをなさっているのは、いかにも残念
だ。人にものを教えるのはお手のものだし、字
もお上手な父上が、せっかく開こうとなさった
あの学校がうまく行かず、あんな荒っぽい仕事
におつきにならなければならなかったとは、不
思議だといっています。ですが、わたしはそん
なまっとうな御両親の子だということを、上流
婦人に生まれついたよりも、自慢にしています。
デヴィアーズさまのお邸へ行く話はまだちっ
とも進んでいないようですが、いまのところ、
ここにいたのが気楽です。ジャーヴィスさんは
とてもいいかたで、わたしをわが子同然に扱っ
て下さいます。御主人のおため専一におつと
めです。いつもいい忠告をして下さいます。お
二人の次には、誰よりも好きです。家のうちに
キチンと筋目をお立てになつていて、わたし
ちみんなたいそう尊敬しています。わたしに本
を読ませて聞くのを楽しみにしています。

それも立派な本ばかりで、二人きりになるとわ
たしたちはいつもそういうものを読んでいます
から、わたしはまったくうちにいるような気が
します。ハリーという余り感心しない下男がい
ますが、その男がわたしに馴れ馴れしい口を利
いたのがジャーヴィスさんのお耳に入りました。
可愛いバミラとかなんとかいって、キスしそ
うに、わたしに抱きついたので、キスしそ
うに怒りました。ジャーヴィスさんは手ひどく
男をお叱りになりました。とても御立腹でした。
わたしの分別と慎しみがわかつてうれし、男
衆など誰も近づけないがよい、とおっしゃい
ました。わたしは格別お高くとまっているわけ
はなく、誰にでもいねいに振舞っています。
しかし、こういう男衆からジロジロ見られるの
は我慢できないのです。お腹のなかまで見抜く
ような目付きをしますから。でも、たいいてい朝
も昼も晩もジャーヴィスさんといっしょに食事
をしますから（ほんとに御親切ではありません
か、あのひとたちとかかすらう種がなく、気
が楽です。といつても、だいたいのところ、み
んなていねいに振舞ってくれます。ジャーヴィ
スさんのためなのです。あのかたがわたしを可
愛がついていらつしやることを知っていますから
不幸せな目にお会いになつたけれども、生まれ
はれつきとした御身分だったことがわかつてい
ますから、みんなジャーヴィスさんがこわいの
です。

書くことが好きなものですから、また長い手
紙になりそうです。退屈なさることでしょう。

しかし、筆を取ったときは、ただこういうつも
りだったのです。なにひとつ心配の種はありま
せん。先日来、馬鹿なことを気にしたものだ
と（あの御注意はわたしを愛するお心遣いだった
のですけれど）われながら不思議なくらいです。
御主人がわたしのような哀れな娘に目をつけて
手を出すなどという下種っぽいことを、なさる
はずがありません。そんなことをなさったら、
わたしの評判だけでなく、御主人の評判に傷が
つきましよう。どんな立派な貴婦人でも奥様に
お迎えになれる御身分なのに。では、このへん
で、

手紙六

御両親様——先便以来、御主人はたいそう御
親切です。亡くなった奥様の衣裳を一重ねと、
下着を半ダースと、立派なハンカチ六枚と、白
麻のエプロン三つと、綿麻のエプロン四枚を下
さいました。衣裳は上等の絹で、わたしにはも
ったいなすぎます。それをお金に代えて、お二
人にお送りしても、御主人が気を悪くならな
ければいいのですけれど。わたしはそのほうが
有難いのですから。

それは悪だくみではないかと御心配でしょう
けれど、じつは、それを下さったとき、ジャー
ヴィスさんもこいっしよだったのです。そのと
き、ジャーヴィスさんにも結構なものを山ほど
お上げになつて、お前さんにはよくして上げた
いといつていた母の形見だから、身につけるよ

うに、とおっしゃいました。それから、わたしに品々をお渡しになりましたが、「これはお前のだ、パミラ。喪服を仕舞ったら、これを仕立て直して、奥様のために着ておくれ。ジャーヴィスさんがお前のことをとても褒めている。いままでも通り、分別深い振舞いを続けてほしいものだ。そしたら、みんながよくしてくれるだろうよ」

そのやさしいお言葉にまったくびくつきして、わたしはものもいえずに帰りました。お辞儀をしただけでした。御主人と、それから、わたしを褒めて下さったというジャーヴィスさんにも。そして、やっと、御主人の御恩恵とジャーヴィスさんの御親切を無にしないように、できるだけ不束なことがないようにいたしたい、と申しました。

善事を行なうのはなんと気持ちのいいことなのでしょう——えらい人たちが羨ましいのは、それだけです。

御主人は立派な紳士だと人がいますが、わたしはいつもそう思っていました。が、それにしても、このすてきな品々をわたしたち二人に下さったときの気品のある御様子といったら、天使のように見えました。

ジャーヴィスさんのお話では、わたしが男たちを近づけていないかとおききになったそうです。たいへんきれいだからだとそうで、そういう連中に騙されて、かかずらった、身の破滅になり、やがて哀れな惨めな目にあらうだろう……ジャーヴィスさんはいつでも進んでわたしの肩

を持つて下さいますが、そのときも、さっそく褒め言葉を口にして下さったそうです。でも、法外なことはおっしゃらなかっただろうと思えます。とにかく、いまのところ及びもつかなくも、今後、その褒め言葉を無にしないように努めましょう。父上母上の次には、わたしはいつまでもジャーヴィスさんをお慕いすることでしょう。では、これで、

かしこ

手紙七

父上様——先便以後、御主人がもっと立派なものを下さいました。奥様のお部屋へ呼び出して、簾簾を開け、フランダース・レースのついた被りものを二組、絹の靴を三足、そのうち、二足もそんなに見劣りせず、わたしにぴったりなのですが（奥様は小さいおみ足をしたいらしい）ありましたから、あとの一足は銀細工の尾錠飾りがついていました。それから、色とりどりのリボンや頭へつける結びリボンを幾つか、薄地の白木綿の靴下を四足、薄絹のを三足、みことなコルセットを二着下さったのです。わたしはあつけに取られて、しばらく口が利きませんでした。でも、靴下に手を出すのはきまりが悪かったです。ジャーヴィスさんがいらつしやいませんでしたから。もしいらつしやたら、なんでもなかったでしょうけれど。ぎこちない様子を御主人は可笑いになって、おっしゃいました。「赤い顔をしないでいいよ、パミラ。」

可愛い娘も、靴や靴下をはかなければならぬということを、わしが知らないとも思うのかい、」

そういわれて、わたしはすっかり度を失い、そのまま立つていられないほどでした。お返事のしようもありませんでした。で、馬鹿のように、泣きそうになり、お辞儀をし、きつと、耳のつけ根まで真赤になって、逃げ出しました。御主人のお言葉に悪気はなかったのでしょうか、それをごどう受け取ったらいのかわからなかったからです。でも、すぐジャーヴィスさんに万事の話をしました。すると、こうおっしゃるのです。御主人がやさしくして下さるのは、取りも直さず、神様のお指図なのだから、いっしょうけんめいに勤めなければいけない。デイヴァーズさまの奥方にお仕える小間使にふさわしい衣裳を取り揃えて下さるのだろう、と。

でも、父上の御注意が頭に浮かびますと、そんな頂きものはみなさんくさいという気がして来ました。見当外れにも、と思うのです。というは、わたしのようないやしい娘を苦しめて何になりましょう。それに、そんなみつともない真似をなさったら、どなたからもよく思われなくおなりでしょう。だから、くよくよしなことにします。もし父上があんなことをおっしゃらなかつたら、もつとも、それはわたしのためにだったに違いないのですけれど、くよくよすることはなかつたでしょう。でも、こうして結構なものを頂いて、もし平気でいられたとしたら、わたしは思ひ上がってしまったかも知れません。ですから、万事がわたしたち親子の

ためになるのだと思ひましよう。神様がお二人をお恵み下さいますように。わたしのためにいつもお祈り下さっていることと存じつつ、

かしこ

手紙八

パミラへ——御主人の御親切とかと、それから、靴下のことでそんな無遠慮な口の利きかたをなさるのに、用心するようにと重ねて注意しなければなりません。もつとも、じつはなんでもないのかもしれないし、そうだといひがとは思ひます。しかし、もしもと思うと、しかも、もしもことがあつたら、わが子のこの世ばかりかあの世でも、永遠の幸福がそれに左右されると思うと、お前のことが心配になるのはもつともでしょう。最悪の覚悟をしなさい。操を失くくらいなら、命を失う決心をしなさい。御主人の御親切をよるこぶ気持が、わたしの注意のために起こつた疑いで薄らいだとしても、しかたがないのだ。やましくない心と比べたら、たかが立派な衣裳の二つ三つをうれしがる気持など、なんだというのか。

じつさい、御主人はたいへんな恩恵をお与え下さっている。が、また、それだけ疑いの目で見られるわけなのだ。「気持のいいことだ」とか、「天使のように見える」とかお前がいうと、そういう恩恵を受けて有頂天になつてゐるのではないかと心配です。年の割には分別があるとはいつても、やつと十五にしかならない娘が浮

世の誘惑と腹黒い青年紳士を相手にするのは、危い話だと、考へても胸がふるえます。もつとも、御主人がそうだったら、ということなのだが、とにかく、有難く思わせる力も、命令する権限も十分ありなのだ。主人なのだから。

貧しくはあつても、両親であるわれわれの祈りをこめて、用心するようにと望みます。用心して悪いことはない。ジャークヴィスさんがいいかたで、お前に親切だから、わたしもおつ母さんもそれだけ気が楽です。ジャークヴィスさんにはなんにも隠さずに、万事の指図をして頂くように。わたしたちのためよりもお前のために祈りつつ、

父母から

ひとがお前をきれいなどといつても、思ひ上がつてはいけません。お前の身体はお前が自分で造つたのではないのだから、そんな褒め言葉はお前が受けるべき筋合ひではない。本当の美しさを造り出すのは操と善良さだけなのです。

パミラ、それを忘れないように。

手紙九

御両親様——残念ながら、デイヴァーズさまのところへ御奉公に上がる望みがすっかり駄目になつたことを、お報せしなければなりません。

奥方は引き受けて下さるおつもりだったのですが、漏れ聞きましたところ、御主人が承知なさらないのだそうです。奥方の甥御がわたしに気を引かれるだろう。わたしがそのかたを騙すか騙されるかするだろう。いや、この子は母が

可愛がつていて、自分の手に託したのだから、うちへおいておかなければならない。ジャークヴィスさんが母親代りになつてくれるだろう……ジャークヴィスさんに聞きますと、奥方は頭を振つて、「そうかねえ」とおっしゃつただけだつたそうです。父上の御注意で心配し出した矢先です。それから、ときどき、とても不安になります。

でもまだ、ジャークヴィスさんには父上の御注意もわたしの気がかりも話していません。あのかたを信用していないからでなく、そんな心配をするとは、思ひ上がつた、うぬぼれ娘だ、と思われはすまいか——というのは、わたしなど、御主人のようなかたとは余り身分がかけ離れてゐるからです。しかし、デイヴァーズさまの奥方が頭を振つて、「そうかねえ」としかおっしゃらなかつたことを、ジャークヴィスさんは何か異様にお感じになつたようです。が、神様がお恵みをお垂れ下さいますでしょう。で、できれば、余り気にしないようにしましょう。気にする種はないでしょうから。でも、今後、どんなちよつとしたことでもお報せします。絶えず御忠告を頂きたい、心を傷めているこのパミラのために、祈つて頂けますように、

かしこ

手紙十

母上様——もう何週間も手紙を差し上げませんので、母上も父上も御不審だろうと思ひます。が、そのわけは、ひどい、ほんとにひどいさわがしが持ち上がったからなのです。たしかに、御

注意がもつともだったとわかったのです。母上様、わたしはほんとに惨めな目に会っています——でも、御安心下さい、自堕落なことはいませんから——神様のお助けです。

この天使のような御主人が、立派な紳士が、哀れなパミラの有難い恩人が、母上の御臨終のお祈りに従ってわたしをお世話下さるはずだったかたが、デイヴァーズ侯の甥御に騙されるといけないといつて、姉上のところへわたしをおやりにならなかったほどのかたが、この紳士が（そうです、そう申さなければなりません、そんな名でお呼びする値打ちはなくなっておしまになったのだけれど）身を落として、哀れな召使にぶしつけな振舞いをなさったのです。正体をお現わしになったのです。この上なく悪性な、ぞつとする正体だと、わたしは思います。

そのあいだ、わたしは手をつかねていたわけではなく、あのかたがたちの悪い考えを、次第に目立たぬような卑しい手を使って、見せてこられた様子を、そのときどきにお二人に宛てて書いていました。ところが、誰かその手紙を盗んだひとがいたらしく、それがどうなったのかわからないのです。長い手紙でした。どっちみち、ひとつのことで怪しからぬ仕業に及んだひとが、ほかのことで、平気で悪だくみをしたのだらうと思います。が、何にしても、あの手紙をどう使うにせよ、むこうが自分のやり口を恥ずかしがるのが落ちでしょう。わたしはいっこう平気です。わたしが操を守る決心をして、貧しい両親のまっとうさを誇りに思っていたことがわ

かるだけでしょうから。

折を見て、万事をお報せします。が、わたしはいま厳しく見張られているのです。ジャヴィスさんにむかってこんないぐさだそうですから——「この子はしゅっちゅう何か書いています。他に仕事がありそうなもののに」なんて。しかも、わたしは四六時中、あの一ひの着類やおうちの敷布などに、せつせと針を動かしているのです。そればかりか、あの一ひのチヨッキに花の縫い取りをしているのです——が、ガッカリしてしまいました。その酬いにわたしが受けそうなものは、ただ恥と汚名と、でなければ、悪口と手荒な取扱いだけなのです。から。すぐ万事をお報せしたい、あの長い手紙が見つかるばいい、と念じつつ、

多分、御主人のことをへあのひとだのなんのと、はしたない物のいいかたをしたかもしれません。でも、それは御主人が悪いのです。ほんとに、なぜわたしなどにたいしてすっかり威敵を失うような軽はずみなことをなさったのでしょうか。

手紙十一

母上様——手紙が見つかりませんから、万事を思い出して、できるだけ短く認めようと思います。この前の前、手紙を差上げたあと、しばらくのあいだだいたい万事がうまうま行きました。が、とうとう、疑わしい節が多少目につくようになりました。わたしを見かけると、いつ

も、御主人は薄気味の悪い目付きでジロジロお眺めになるのです。ある日、庭のあずまやで針仕事をしていますと、ちょうどジャヴィスさんが座をお外しになったときでしたけれど、わたしのところへいらっしゃいました。出て行くとうとうしたら、こうおっしゃいました。「いや、いつてはいけない、パミラ。お前にいうことがあるのだ。そばへよると、お前はいつもわしがこわいともいうように逃げる」

ドギマギしてしまいましたが、とうとういいました。「お申しつけの御用事がございますのに、おそばにいましては、召使に過ぎたこととでございます。わたくしはいつでも自分の分際を心得ていたいと存じます」

「なるほど、だが、ときには用事をいつけることもあるのだ。ここにおいて、わしのいうことを聞きなさい」

わたしは狼狽したまま、じつとしていました。震え出しました。手をお取りになったので、なおさらでした。そばに誰もいなかったからです。「デイヴァーズの姉が」（といいかけて、わたしと同様にどう言葉が続けたらいいのか途方にくれた御様子で）「お前を引き取りたがっている。だが、お前がそのまま実直に働いていたら、わしがしてやろうと思っているだけのことは、姉はしてくれないだらう。どうだね」と熱心に「姉のところへ行くよりも、ここにいたいとは思わないかね。」ギョッとさせるような目付きをなさって、なぜだか、気もそぞろな御様子なのでした。

やつと口が利けるようになると、「御免下さいまし。わたくしのお仕える奥様がいらっしやいませんし、それに、大奥様がにお亡くなりになりましたからもう一年もたちますから、恐れ入りますが、わたくしデイヴァーズさまの奥方にお仕えいたしたいと存じます。それは——」

すると、ちよつとせきこんだ口調で——「それは、お前が馬鹿で、自分のためがわからなからだ。わしのいうことを聞いて、そちらがヘマをさえしなければ、立派な一人前の女にしてやるつもりなのだ。」そして、わたしを抱きかかえて、キスなさいました。

で、御主人の悪性なたくらみがすっかり暴露したわけなのです。わたしは身をもがき、震え、恐ろしさにボツとなり、倒れてしまいました。気絶はしませんでした、といって、正気でもなく——すると、ぐったりしたところを抱きしめられました。二、三度、すさまじい勢いでキスなさいました。とうとう、わたしは身をもぎ離して、あずまやを出ようとした。が、御主人は無理矢理にそれを引き止めて、戸を締めておしまいになりました。

わたしはもう命を差し出してもよかったのです。すると、「いたい目に会わせるわけではないのだ、パミラ。こわがることはない」「わたしくし退らせて頂きます」「いけない。お前、誰に口を利いているのかわかつているのか。」わたしは恐れも敬意もすっかりかなぐり棄てて、いいました。「わかつていますとも——でも、旦那様は主人のたしなみをお忘れになったので

ございますから、わたくしも自分が召使だということをお忘れたいくらいでございます」

わたしがサメザメと泣き出しますと、「馬鹿なやつだ。いたい目に会わせたわけでもないのに」「へいたい」でございますって。おかげで、わたくしは自分の分際を忘れてしまいました。生まれつきの身分の違いがなくなつてしまいました。可哀そうな召使にお人柄を汚すようなひどいことを遊ばしましたから。でも、わたくしこれだけは申し上げます。わたくしは貧しいうちの子でございますけれども、まっとうな人間でございます。王子さまでいらつしても、それだけは譲りませんから」

怒つて、「誰が譲れといった。メソメソするな。たしかに、わしは自分の人柄を汚すようなことをした。だが、それはただお前を試すためだったのだ。このことを内緒にさえずりや、お前の分別を考え直してもいい。それ」と、わたしの手に金貨を押しつけて、「びっくりさせた償いだ。さあ、庭をひとまわり歩いて、泣き顔が直るまでうちへ入るな。誰にもなんにもいふな。そうすれば、万事うまく行く。わしも勘弁してやる」

「お金は頂きません。貧乏ではございますけれど。」じつをいうと、もし頂いたら、手附けを取つたようなものでしたから、それを腰掛けの上へおいて、御主人が御自分のなさつたことに当惑顔をしていらつしやるすきに、戸を開け、あずまやの外へ出ました。

あとから声をかけて、こうおっしゃいました。

「内緒にするんだよ、パミラ。まだうちへ入っちゃいけないぞ」

なんとまあ卑しいお振舞いだったことでしよう。そのために、れっきとした紳士が、なんとまあ御器量をお下げになったことでしょう。お人柄にかかわるような、そして、目下のものの器量を上げるようなことを、なさつたのですもの。わたしは庭をひとまわりふたまわりました。といっても、ひどい目に会つては困りますから、おうちの見えるところをでした。そして、目をふくために手に息を吹きかけました。おいひつにそむく気はなかつたからです。この次の手紙で、もっと仔細を申し上げます。

お二人ともわたしのためにお祈り下さい。まだこのお邸から逃げ出さないのを、お怒りにならないで下さい。つい先ほどまでは楽しかった、でも、いまは、びくびくしていなければならぬお邸なのですけれども。急いで筆をおかなければなりません。かしこ

手紙十二

母上様——悲しい話の続きを認めます。目をふいてから、わたしはうちへ入つて、どうしたらよいか思案にくれはじめました。お邸を出て隣の町へ行き、お二人のところへ帰る機会を待とうかとも思いました。が、御主人が下さつたものを持つて行こうかどうか。持つて行くにしても、どうしてそれを持ち運んだらいいのか、決心しかねました。それから、また、そ

んなものはいっさいあとへ残して、着のみのままで行こうかとも思いました。が、町まで二マイル半もありますし、脇道を通らなければなりません。わたしはかなり立派な身なりをしていますから、逃げ出す種と同じくらい、ひどい目に会うかもしれない。それに、こうも思いました。「何か物を盗んで、逃げ出さなければならぬことになったのだと、噂が立つだろう。親のところへ汚名を持ち帰るのは悲しいことだ。」むかしのくすんだ手織の普段着が恋しくなりました。それから、わたしがまだ十二にもならなかったとき、このお邸へくるために支度して下さったあの質素な、しかし、けがれのないう着物も（あれだけして下さるのもたいていではありませんでしたが）——あれは、奥様が御存命のことでした。ジャーヴィスさんに話して、指図して頂こうかとも思いましたが、ただ、内緒にしろという御命令が気がかりでした。あんなことをなさったのを恥じて、二度とは手をお出しにならないだろう。それに、ジャーヴィスさんはいろいろな不幸な目にお会いになって、いまでは、御主人に頼って暮らしていられしやるのだから、わたしのためにジャーヴィスさんに御立腹の矛先を向けさせるのは悲しいことだ、と思いました。

て、「なぜ晩御飯にこないの、パミラ。何か困ったことがおありなのだね。どうしたのか話してごらんよ」わたしは夜いっしょに寝させて下さるようにと頼みました。幽霊がこわいのです。ジャーヴィスさんのようないいかたにはとっつかないでしょうから……「馬鹿馬鹿しい口実だよ。いままで幽霊などこわがらなかったじゃないかね」——（そういわれれば、その通りなのでしょう。）「でも、わたしの寢床へ来てもいいよ。どういうわけだかしらないけれどね。ただ、晩御飯にだけは顔をお出し。」それは勘弁して下さいとお願ひしました。「わたし泣いていましたから、召使たちの目につきます。そばにひとがいなくなったら、ジャーヴィスさんにはなんにも隠してしませんわ、わたし」わたしのことを書きして下さいました。急いで寝支度をして、みんなにおしやいました。よく眠れないから、パミラにいっしょに寝てもらって、本を読んでもらう。パミラは本を読むのが好きだから。

母上様、それでよろしかったのでしょうか。ジャーヴィスさんはわたしといっしょに涙を流して下さいました。わたしは話しながらシクシク泣いていたのです。どうしたらいいか教えてほしいと頼んで、父上のお手紙を二つとも見せました。すると、ジャーヴィスさんはその中味と書きかたをどちらもたいそうお褒めになつて、お二人について、いろいろうれしいことをおっしゃって下さいました。しかし、暇を取ろうなどとは考えないように、「多分、お前さんが立派に操を守る態度を見せたから、旦那様は御自分の振舞いを恥じて、二度とそんなことはなさらないだろう。でも、わたしはお前さんがきいいのが何より心配だ。どんな道心堅固なひとでも心を動かすだろうから」——それから、「わたしが人に頼らずに暮らすことができればよいのだがね。そうしたら、ひっそりした家を借りて、お前さんを娘分にして置いて上げるのだがね」

そういうわけで、ジャーヴィスさんのお指図を受けるようにとのことでしたから、しばらく様子を見る決心をしました。追ひ出されるようなことがあったら、話は別ですけれども。また、最初のお手紙には、気づかわしいふしがあったらすぐ帰ってくるようにとありましたけれども、ここにじっとしていて、お二人のおいひつに背くことにならなければいいが、と思います。もし背いたら、神様のお恵みに与れず、せっかくお二人がわたしのためにお祈り下さるのが無駄になりましょうから。

明くる日一日じゆう、わたしは沈んだ気持で、長い手紙を書きはじめました。御主人はわたしを書いているのを御覧になって、(先便で申し上げましたように)ジャーヴィスさんに、「あの子はいつでも何か書いている。ほかにすることがありそうなものだ」とかなんとか、おっしゃったそうです。書き終わりますと、それを奥様の化粧室の鏡台に隠しました。そこへ入るものは、御主人は別にしないで、わたしとジャーヴィスさんのほかに誰もいないのです。が、封をしようとしてみると、びっくりしたことに、みつかりません。ジャーヴィスさんはなんにも御存知ないし、そのあいだに御主人があたりにお近よりになったことは、誰も知らないのです。困ってしまいました。御主人がなんとかしてあの手紙をお取りになったのだと、ジャーヴィスさんもわたしも思っています。御主人はムツとした怒ったお顔をなさって、わたしを避けていらつしやるようです。わたしは避けた、などとおっしゃいましたけれど。が、そのほうがもっとひどいことになるよりもましでしょう。

そんなに手紙を書いて暇つぶしをしてはいけないといえど、御主人はジャーヴィスさんにおいつけになりましたが、立派な御身分のかたがつまらないことを気になさるものです。わたしはほかの事を怠けているわけではありせんから、きつと、手紙の種を想像して腹を立てていらつしやるのでしょう。先が思いやられます。しかし、ジャーヴィスさんといっしょに寝るようになって、大分気が楽になりました。一方

では、毎日びくびくし、他方では、することなすことに不機嫌な顔をされて、ほんとにたまらないのですけれど。

こんなに誘惑を受けたり、いやな顔をされたりするくらいなら、あの屋根裏部屋の寢床を離れるのではなかった、と思います。少し前にはなんとわたしは幸せだったことでしょう。それが、いまではすっかり変わってしまつて——胸を痛めているパミラのためにお祈り下さいますように、

かしこ

手紙十三

わが子へ——お前の難洪と、その身をさらしている誘惑のために、われわれの胸は血を流す思いです。二人とも毎時間祈っています。もし同じ仕打ちが繰り返されるようなら、この悪しき邸と男とから逃れるように。相談相手のジャーヴィスさんがなかつたら、最初から逃れるべきだったのだ。が、いままでのところ、お前の所業に難はない。しかし、そうしていると、最悪のことが起こりはしまいかと、われわれの胸が痛みます。誘惑は辛いものだ。が、それなくしては、自分の本性も、自分にできることも、われわれにはわからないのだ。

お前の危難はたいそう大きい。富と青春と、世間一般に立派な紳士だと考えられている人々にたいして、あらがわなければならぬからだ。が、あらがいがおせたら、ひじょうな名譽になるだろう。いままでのお前の所業と操を大切に

する教育とを、また、貧しさよりも汚れを恥じるようにお前がしつけられて来たことを思うと、神様のお助けでこの誘惑に打ち勝つだろうと、神慮を信じています。が、それにしても、始終そんな大きな気がかりがあつては、命も重荷に相違ないから、自分の力に頼りすぎるのは思ひ上がりだろうから、しかも、年端もいかにぬ小娘のお前をたぶらかす策略を、えらい人々の通例で、相手は悪魔と結託して用いているようだから、不満を抱いて豊かに暮らすよりも、うちへ帰つて、安らかに貧しさをともにしたほうがよいとわたしは思う。そのような豊かさは危いことなのだ。神様のお導きでなんとか無事にことが済むようにと祈ります。ジャーヴィスさんに相談して、いっしょに寝て頂いているようだから(よくそれだけ分別を働かしたと思います)まあまあと胸を撫で下ろしています。神助にお前を委ねて、

父母から

手紙十四

御両親様——ジャーヴィスさんといっしょにこの二週間、たいそう気持よく過ごしました。そのあいだじゆう、御主人がリンカンシャのお邸とデイヴァーズさまのところにいらつしやうたからです。でも、昨日お帰りになり、すぐジャーヴィスさんとお話し合ひになりました。だいたい、わたしの噂だったそうです。「ジャーヴィスさん、あなたはパミラの肩を持つが、あの子はこの家で役に立つと思いませんか。」